

第6回 滋賀県立信楽学園あり方検討会

議事概要

開催日時：2025年12月24日（水）17時～19時

場所：滋賀県立信楽学園

出席委員：窪田座長、谷村委員、宇野委員、桑田委員、松岡委員、城委員

【論点1：信楽学園を県立施設として維持していく必要性はどのような点に求められるか】

- 信楽学園が現状定員に達していないことについては、県全体でどのような居場所があり、溢れている子どもがどれくらいいるのか、ニーズが埋もれているのか、それとも居場所は充足しているのかということ、ある程度データを出して、県民に丁寧に説明できるようにする必要がある。
- 特別養護学校や通信制・単位制の高校に進む生徒も増えているが、中学校卒業後の進路にどうつながっているかのデータがあれば現状がよりよく把握できるのではないかと。
- 特別な支援を必要とする生徒や不登校の生徒の進路状況も含めて現状が分かるデータ等があるとありがたい。
- 夜間定時制の高校の先生からは、入学する生徒の7割程度が中学校の不登校経験があり、高校卒業資格はとっておきたいということで進学されているという話を聞いた。
- 高校の種別（通信制、定時制、特別支援学校、普通科か農業高校かなど）毎にどういった生徒の進路となっているか、もう少し詳しいデータがあったらいい。
- 高等養護学校では定員72名に対し、受験した生徒が107名だったので、進学できなかった生徒の中には一般高校に進んだ方もいる。特別支援学校・学級に在籍している生徒は特別支援学校の高等部に195名進学しているが、一般高校進んだのは335名であり1.7倍も多い。通常学級における特別な支援を必要とする児童生徒数を見ると、高等学校では2,162名と、全体の高校生うちの7.62%となっている。
- 今後中学生の人口がどれくらい減っていくのかというデータもあるとよい。

【論点2：子どもや家庭のニーズにも対応し、今後、信楽学園はどのような機能を果たしていくべきか】

- 粘り強さや人間関係の折り合いのつけ方とか、感情論が先立ってやめてしまわないといった働く力をつけるために、数か月単位の実習を通じて実際に社会に出て学ぶ経験は学校ではできないし、社会の厳しさも体験できる。たとえ場所が変わっても、実習先を確保して、信楽学園の就労支援の実践が今後も発揮できる環境であってほしい。
- 就労支援単独ではなく、どう人生生計を立てていくか、どう生きていくかということ

- に寄り添い、生活支援や家庭支援等と重なりながら就労支援をしていくことが大事。
- 働くことへの意識の違い以前に、働くことのイメージがわからない子どももたくさんいるが、自分の得意なことや自分の力を見極める・知るということがすごく大事。
 - パソコンの技能訓練等、新たな時代の要請や社会のニーズの多様化に対応した実習科目も広げているが、これからも今の時代に応じた・園生たちがやってみたいと思えるような取組を模索して、働く意欲につなげていってほしい。
 - 信楽学園が培ってきた専門性・強みを、今の時代の変化に合わせてブラッシュアップしながら、就労支援の高い専門性がそこにあるという状態は維持していく必要がある。
 - 昔と違って、今の信楽学園の子どもたちは3年間頑張って企業に就職するという目標意識は高くはない。一般企業を目指すコースと福祉的就労を目指すコースを分けることや、もう少しどこかに特化をするということも考えてもいい。
 - アプリなどで働く時間を決めてスポットで働く働き方も増えており、いろんな働き方があるので、今の高校生年代の若者にどのような職業訓練したらいいのかも考えるべき。
 - 自立に向けた目標意識がどう変化していくのかとか、就労続かない場合のアフターフォローをどうしているかなど、就労支援のノウハウや実績が見える化できれば魅力になる。
 - ユニット化・小規模化は今の時代に求められている。
 - 短期入所は市町の事業ではあるところ、必要であれば実施してもいいと思うが、家に帰れる子どもと帰れない子どもを空床利用で一緒の空間で対応するのではなく、専用の施設・フロアを用意すべき。
 - 短期入所は南部でも北部でもニーズがあるので、何か改善策があるとよい。
 - 保護者もなかなか入所施設を希望しないが、こども家庭庁において、市町事業とされている児童育成支援拠点事業のようなかたちで、社会的にも大変な家庭の子どもにきちんとした生活リズム・生活の流れを作るような支援を、通所の形ででもできればいい。
 - 生活基盤の厳しい家庭出身の子どもが地域で生活していくことを見据えて、家族を支えていくための仕組みやネットワークに積極的に参加してもいいのではないかな。
 - 彦根市の私学の高校では、家庭基盤の弱い生徒も多い中、要対協と上手に連携しており、中退にもならないし、就労に繋がるケースもよく聞いている。県立高校では中退者がすごく多いので、教育委員会と連携し、フォローするような機能があればいい。
 - 18歳以降の機能も充実していくことが必要ではないか。時間をかけて社会に適用していく支援をするのは学校では限界があるので、安心できる場で、言葉を信じられない・違う形で受け取ったりするといったようなねじれをほぐす機能は継続して欲しい。
 - 1人暮らしの体験のようなかたちで自立度を高めていくための工夫も考えられないか。小規模化のメリットにもなるのではないかな。
 - 社会に出ていくことを見据えたときに、信楽学園で家から離れて暮らすことの意義がどういうものであるかの気づきが中学校3年生時点で、先生や保護者、生徒本人を含めて

できるような発信を担ってほしい。

【論点3：信楽学園を取り巻く状況にも対応し、施設の立地や施設のハード面の在り方をどのように考えるか】

- サテライトによる分散化はいいと思うが、本体施設によるバックアップ機能が重要。本体は入所施設だが、サテライトは単独で生活訓練をして、子供に応じた形で個別化・分散化していくイメージもある。
- サテライトの形で小規模化・分散化したときに、就労支援を含めた信楽学園の専門性や強みが薄まらないようする必要がある。
- サテライトのイメージを共有した上で、サテライトと本体の施設の機能を検討する必要。
- 現在定員に空きのある近江学園の敷地内に新たにサテライトの建物を新築するのは無駄遣いにならないか。それであれば他の場所、例えば北の方に建ててはどうか。
- 近江学園が南にあったら、北の方に一定の規模の拠点を設け、例えば、日中の作業やそこから通学すること、短期入所等の一定の機能が果たせる設備等が必要ではないか。一時保護されても学校に行きたいという思いを持っている子どもは結構いると思う。
- 滋賀県で北と南にあると、保護者が選ぶときにも魅力は大きい。
- もし近江学園のサテライトとするのなら、それぞれの地域でその核になる人材を確保することがすごく重要であり課題となる。
- 信楽学園のこれまでの専門性をどう生かしていくかということが基本であり、分散化については、体制確保・質の確保のためのベースアップを大事にした上での検討になる。
- 短期入所や学校に通うといったことは、今までの信楽学園にない機能なので、実際の運用可能性や、入所児童とのバランスなど、様々なことをしっかり考える必要がある。
- 信楽学園の機能や社会的意義をどう生かしていくのかが議論の根本であり、サテライトでどこまでそれが果たせるかということも論点。人材確保や利用者の利便性、立地や、費用の問題など、メリット・デメリットを整理した上で、議論をまとめる必要がある。
- 同じ施設内で、日中学校に行く子どもと学校に行かない子どもがいるということはどう考えるのかは、改めて信楽学園の機能をどう考えていく中では大事な論点。
- 同じ県立と言っても、直営や、委託、指定管理等の運営方式が様々あり得る中、近江学園のサテライトということになると、直営にするのかなどの検討も必要。
- 土砂災害警戒区域および浸水警戒区域では建て替え等は可能なのか。